
テイルズ オブ リュミエール

フォルネウス

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

テイルズ オブ リュミエール

【Nコード】

N8304W

【作者名】

フォルネウス

【あらすじ】

王都での学園 【テュウタレリイ】でを魔術、剣術を学ぶ少年
アスカ・M・シュトラール

だが成績は下の下

つまり俗に言う落ちこぼれ街道まっしぐらの少年

二学生 of 課題でもある中級魔術の形成

剣術の一年の成果を見るための武闘大会

そんな課題もままならないアスカ

だが、そんな彼にも大きな運命の波に飲み込まれるときが来た

趣味でもあるマナの発生の観測のため、一人夜中に寮を抜け出し、
王都の中央にある世界樹に向かう

観測機を仕掛けようとしたその時、数十年ぶりにマナの大量発生が
観測できた

マナの大量発生に感動するアスカをよそに、事件は起きる

そして、世界をも巻き込む事件の輪へとアスカは巻き込まれていく

プロローグ（前書き）

プロローグ

世界には

まだ自分たちの知らない世界がある

目に見えないもの

手で触れることのできないもの

普通では考えられない生き物

普通では考えられない現象

そんな生き物や現象が起きる世界

【アルカディア】

今、【アルカディア】は数千年前に理想郷といわれていた世界の美しさは失われつつある

混沌へと進む世界の中

人間は利己的な考えの下、更なる混沌へと導く

世界中の人間が生み出す悪意が瘴気へと変化し、世界樹へと影響を及ぼす

世界樹を失えば、【アルカディア】は必ず崩壊する

そんな世界がこれから先、救われるのか？

それとも・・・

廻り始めた運命の齒車 前編（前書き）

スキット1

【検定テスト】

アスカ「はぁ…鬱だよ…」

アスカ「でも今日こそはちゃんと結果をださないとない!!」

アスカ「騎士団の一個小隊が護衛に入るから、武器は要らないんだっけ…とりあえずは術の検定テストに必要なものだから…」

アスカ「とりあえずは何もいらないし、後は水分だけ…かな? あっ!!!!?」

アスカ「やばい!!!! もう集合の時間だ!!!!!!」

前編

「次!!!!!!!!!!!!!! アスカ・M・シュトラール!!!!!!!!!!」

「はっ！……！！！！！！
はい！！！！！！」

そこは王都アインストにある魔術^{まじゅつ}、戦技^{せんぎ}を学ぶ者、学者として研究する者たちが集まる学院

【テュータレリイ】

「今回の課題はわかっているな？」

「はい！」

始まりは今まさに自分の一年のうちに三回ある魔術、戦技まじゆつ せんぎの検定テストを受けている水色の長い髪を後ろで束ね、片方のみあげだけ長い特徴的な髪型をした女の子にしか見えない少年 服装はインナーには黒のハイネックTシャツ、アウターには片腕がノースリーブで片腕は着物のような袖口をした和服を洋風にしたような服装をした アスカ・M・シュトラールを中心に始まる

アスカは目の前で腕を組み見据えてくる教官でもある金色の短髪を無造作にセツトした顎鬚あごひげを蓄えた40代くらいの男性　マリク・シザースを見据える

冷や汗がとめどなく流れ、握る拳にも力が入る

「中級の魔術の成功です!!」

アスカの応えにコクリと頷くマリク

「では、やってみろ」

マリクによる検定テスト開始の合図にアスカは大きく深呼吸し、
検定テストという緊張をほぐそうとする

でもやはり広大な模擬戦フィールドの中心にある草原地帯で同じ
訓練を選択している20人くらいの同級生たちの前でやらなければ
ならない・・・

そんな緊張が自分をどんどん追い詰めていく

「雷鳴纏いし、敵ふお穿て、聖なるつるりいっ!!! サンダーブレ
ード!!!!」

アスカは空に手を翳し、中級魔術 サンダーブレードを発動させ
ようとした

だが、発動はしたのだが、形が不安定で剣と言えるような形状をしていなかった

同級生からは笑いが起こり、教官でもあるマリクからは呆れた視線を向けられる

簡単なことだった

魔術で1番大切とされる詠唱呪文を正しくいえないからである

「アスカ・・・お前はもう少し人前での発動に慣れることだな・・・今回の評価は10段階のうち2だ」

「はい……マリク教官……」

淡々とした口調で喋るマリクからアドバイスと評価を受け、アスカは待機している同級生たちの方へと下がっていく

その間、同級生たちからチラチラと見られるたびに笑われながらも、アスカは泣きそうになる気持ちをグツと堪え、一番後ろで待機する

1

検定が終わるとアスカたち検定で学園へと戻る

アスカは戻るまでに惨めな思いをしながらもずっと後ろで帰路についていた

アスカは学院がある王都アインストにたどり着くと、教官 マリクの自由時間を与えろという言葉と共に王都内にある学園区画、商業区画、王城区画、住宅区画の四つに分かれているうちの商業区画へと足を運ぶことにした

理由は簡単なことである・・・

「(こんな惨めな姿・・・もう知っている人には見られたくないし・・・)」

活気ある商人たちの声が飛び交う中、アスカは一人歩みを進める

アスカが一人向かうのは、滅多には行かないが、【テユウタレリイ】の学生たちには大人気のオープンカフェ【憩】である

アスカはオープンカフェに着くと一番隅の目立たない席へと座る

席に座ると同時にアスカは机に突っ伏し、ため息の連続
そして、ブツブツとこれまでの反省＋後悔などを呟く

「もっと出来るようになりたいよ・・・はぁ・・・」

「お客様？ご注文はどういたしますか？」

アスカは突然声を掛けられ、思わずビクツとし、体を起こすと苦笑いを浮かべているウェイトレスさんがこちらを見ていた

アスカは顔が真っ赤になっているのを隠すようにうつむきながら・
・

「アールグレイをお願いします・・・／／／／／」

「かしこまりました♪」

注文を済ませる

そんなアスカはふと王都中央にそびえ立つ、世界のエネルギーの
源と言われている世界樹へと視線が移る

「そういえば最近は観測してなかったなあ・・・まあ、ここ数年は
マナが枯渇しつつあるって情報も出ているくらいで、マナの発光現象
なんて起こらなかったし・・・無駄かも知れないけど、今日は行

アスカは学院へと向かうための王都中央にある各区画へと渡るための十字にクロスしている橋を渡っていた

元々この王都【アインスト】は湖に囲まれた街、元々湖の中心にあった世界樹、世界樹を残しながら発展して、今の原型を作り上げている

橋の真ん中には広場があり、世界樹がいい感じの木陰を作り、そこには自然と人が集まっている

アスカも中心の広場まで来ると世界樹を見上げる

世界樹は堂々と花をつけ、咲き誇っている

その姿が綺麗で、アスカはいつまでもその美しい世界の名を冠する樹を眺めていたい・・・そう思えて仕方がなかった

「ホント・・・綺麗だな・・・嫌なこともふきと・・・んじゃ駄目だよね;;」

そんなアスカは現実逃避をしようとしたが、検定テストという名の悪魔に現実へと引き戻されていく・・・

「ああ・・・蘇ってくる;; なんであのときくじでAブロックを引いちゃうんだよ・・・なんで相手が学園でもトップクラスのアスベル・ラントくんなんだよ・・・というかAにはトップクラスの間しか集まってないし・・・」

そして、アスカは引き戻されると同時に思い出したくもない最悪なことまでも思い出してしまう・・・

ちなみに学院の2学生には三人のトップクラスの実力を持つ人間がいる

一人目がアスベル・ラント

まじめで礼儀の正しく、誰からも好かれる青年剣士

抜刀術を使いこなし、【アインスト】騎士団からスカウトがあり、今年の過程が終了次第、騎士団へと入団することが決まっているほどの実力者

二人目がリオン・マグナス

学校に通う必要性がないと言われているほどの実力を持つ、誰も人を寄り付かせないほど冷めた性格の少年剣士

見たこともないような剣とダガーの二刀流を使いこなす人物、うわさだが、この王都で客員剣士を勤めているといううわさが立っているほどの実力者

三人目がゼロス・ワイルダー

年齢的に学院に通っていること自体不思議なのだが、本人いわく、暇つぶし、女の子を口説くために通っているという軽薄なイメージを漂わせる剣士

だが、剣術と魔術は一流、実力はリオンやアスベルに匹敵する実力を持っている

しかし、軽薄な性格やお調子者な性格により、アスベルやリオンとは違い、そこまでの人気はない

アスカはそんな三人がいるブロックを引いてしまったのである

「なぜ上手いこと三人がAブロックなんだよお・・・分かれてたっ
ていいじゃないかぁ・・・」

アスカは一目も気にせず落ち込んでしまう
それほど三人とアスカの間には天と地の差ほどの実力差があるの
である

だが、そんなことやっているうちにも刻々と時間が近づいてくる、
ズボンのポケットの中にしまっている懐中時計かいちゅうどけいで時間を確認してみ
ると、準備時間などを考えるところもう既に向かわないと遅刻する可能
性まで出てくるほどの時間である

アスカは立ち上がり、トボトボとした歩調で学院の方、つまり橋
の東側の方へと向かっていく

『貴方を待っていた・・・』

ただ・・・アスカは何か聞こえたような気がして振り返る
しかし、そこにはこちらに話しかけようとしている人たちは誰も
いない

アスカは不思議そうな表情を浮かべながらも、ため息をつき、自
分の逃げたいという気持ちから幻聴が聞こえたのだと理解し、アス
カは情けない自分の性格に絶望しつつも、足は学院の方へと歩みを
進める

— — — — —
— — — — —
— — — — —
— — — — —
— — — — —

アスカは学院内にあるコロッセオを呼ばれている戦技訓練施設せんぎくんれんしせつの東と西で分かれている入場口で待機していた

腰には装飾が施された両刃剣が装備され、素肌あらわが露になっている方の手には翼を模した白を基調とした籠手を装備している

アスカは冷や汗をかきながらその場で震えていた

「あう…あう…」

アスカは体の水分がすべて放出されているんじゃないか？と思えるほど流れていた

アスカの表情が固まっている上に視線を左隣に向けないように努力しているようにも見える

それは何故か？

「……………」

隣には黒髪で長い前髪で片目を隠している青を基調とした騎士服、紫色のマントをした少年 リオン・マグナスが隣にいるのである

他にも舞台袖ぶたいそでで待機している人間もいるが、リオンに近づこうとしている人間は誰もいないのである…偶然、先にそこに待機していたアスカ以外は…

「きよ……きよきよきよ…今日はいい天気だね！！りりりりリオンくん………」

「……………」

アスカはあまりにも気まずい雰囲気のため、耐え切れずにリオンの話しかけてみるが、やはり無視されてしまう

それどころか、こちらを向くこともなく、ただ、アスカはいないものと考えているが如く、何も話さない

それを見ていたほかの生徒たちは、珍しく、アスカに同情の眼差しを送っている

「えと！！！！リオンくんは今日の検定テストどう？自信ある？」

アスカはもてる一番の勇気を振り絞り、リオンの方に振り向き、笑顔で問いかけてみる

さすがにこれだと応えてくれるだろうと力いっぱい大きな声で尋ねる

「僕なんて自信が……」

「お前なんかに興味はない……僕にかまうな……」

どうやらかなり不愉快だったらしい

鋭い眼光がアスカの満面の笑みへと突き刺さる

満面の笑みだったアスカの表情はどんどん引きつっていき、最終的には涙目

「ごめんなさい……」

アスカは謝るとその場に座り込む

リオンはそんなアスカには目もくれず、目を瞑り、ソッポをむくそんなこんなでアスカはリオンとの交流に失敗した

まあ相手がリオンだから仕方がないと言えば仕方がない話なのだが

もちろんそんなアスカを見ていたほかの生徒たちは哀れみの視線を向けてくる

「アスカ、次はお前の出番…どうした？」

そんな時、出番を知らせるため、通路の奥から現れた検定テストの試験官でもあるマリクは本気で落ち込んでいるアスカにキョトンとした表情で見据える

マリクはそれから周りを見回してみると、他の生徒たちの視線が一つに集まっていることに気づき、マリクはすべてを理解する

「ああ…まあその鬱憤をアスベルにぶつけろ…」

「出来れば…ですけどね…」

アスカはため息をつき、立ち上がると武舞台へと歩を進める
出ると同時に向かいの視線上に赤に近い茶髪をショートボブヘアをした白を基調とした装飾が施されたロングコートを着ている青年
アスベル・ラントがこちらを見据えながら歩いてくる

アスカは、武舞台へと近づくにつれてさっきまでのことなんて考えられなくなってくる

ドーム状に作られているこの施設
周りを見渡すと自分たちのいる戦闘フィールドから5メートルくらいの高さにある観客席が目に入る

歓声が入り乱れ、冷や汗が一気になだれ出る

アスカは武舞台へと上がる階段をゆっくりと一段一段しっかりと踏みしめる

武舞台に上がると緊張が最高潮へと高ぶる

ゆつくりと中央まで向かうと同じように道のりを歩んできたアスベル・ラントが目の前に現れる

「はじめましてだね？アスベル・ラントだ、今日は一戦よろしく！」

微笑みながら、アスカに握手を求めるアスベル

アスカは苦笑いを浮かべながら、アスベルからの握手に応え、握手に応じる

「はじめまして、アスカ・M・シュトラールだよ…自信がないけど…お手柔らかに…」

その瞬間、観客たちの声援はボルテージを上げる

それが、アスカにとってはかなりプレッシャーなのか、無意識にため息をついてしまう

「そんなに気負う必要はないと思うぞ？落ち着いてやれば、いつもどおりにできるさ！」

そんなアスベルの慰めに僕は心の中で『いつもどおりでも勝てる見込みはないんだけど…』と思いつつも、もう試合が始まる時間らしく…

「アスベル・ラント、アスカ・M・シュトラール、位置に着きなさい」

というレフェリーからの声が掛かる

アスカとアスベルはそれと同時に、互いに距離をとるように離れる
アスベルは鞘に納まった剣を左手で持ち、右手は柄に添えるように構え、抜刀術の構え…

アスカは鞘から剣を抜き、両手で柄を持ち、真正面に構える

「ではAブロック第一戦 アスベル・ラントVSアスカ・M・シュトラール……はじめ……!!」

レフェリーの開始の合図と同時にアスベルは先制攻撃と言わんばかりに、地面を蹴り、アスカに剣が届く間合いに入った瞬間、右手で剣の柄を握り、抜刀術を繰り出す

アスカは後ろに飛び退き、回避する

「うあああっ……!!」

「まだまだ行くぞ……!! 魔神剣……!!」

アスカが地面に着地したと同時に、アスベルは剣を高速で右下から振り上げた

その瞬間、地面を這うように発生する衝撃波となり、アスカに迫る

「っあ……!! 蒼破刃……!!」

アスカは慌てて剣を右手で持った瞬間、振りぬき、弾状の衝撃波を生みだし、魔神剣へと放つ、その瞬間、互いの技と技は相殺され、互いに掻き消される

その瞬間、アスカは安堵の息を吐いた……

それがアスカにとって間違いだと気づいたのはものの数秒での出来事だった……

「安心するのはまだ早い……!! 決めるぞアスカ……!!」

「へっ……!!……!!」

アスカはわけのわからないうちに、アスベルの繰り出す、足払いをくらい、態勢が崩れたと同時にアスベルの蹴り上げが腹部にヒツトする

そして…

獅子をかたちどつた闘氣が放たれ、アスカは場外へと吹き飛ばされる

「勝者！！！！アスベル・ラント！！！！」

[illegible]

「ん……あ……」

目が覚めるとそこは真っ白い天井

周りから医療室独特の薬品の匂いが漂い、ぼんやりしていた意識を目覚めさせるのにはいい気付けがわりになっているような気がする

アスカは体を起こし周りを見渡す

寝転んでいたベッドの近くにある机にアスカの持っていた鞆に納まった剣が立てかけてあり、机の上には籠手が置いてある

ここにいるということは…

「僕はやっぱり負けたわけか…ははっ…参ったなあ…はあ…」

自分の情けなさに思わず失笑してしまう

僕は痛みを我慢しながら、ベッドから降りると剣を腰に携え、ガントレットを右腕に装備するとカーテンを開ける

「もういいのか？アスカ？」

思わずキョトンとしてしまう

アスカの視線の先にはマリクとそばに宙に浮いている小さな翼で羽ばたく犬のような顔つきのフワフワとした毛並みが特徴的で額に角が生えた生き物がいた

「アスカさまあああああああつ!!!!!!!!!!」
「ムギユツ!!!!!!!!?」

その顔面に抱きついてきた生き物を優しく引き離すと微笑みながら、自分の頭の上に乗せる

「ホロフィーも来てくれたんだね? ありがとう…マリク教官、体調はもうだいぶ回復しました!」

ホロフィーにお礼を言うと、そのあとにマリクにもお礼を述べる

「ついでのようにお礼を言われるとは、俺も軽く見られたものだな」
からかうように微笑みながらアスカに軽い冗談をぶつけてみる
すると…

「すっ!!! すすすすすすいません!!!!!! マリク教官相手に失礼な真似を!!!!!!!!!!」

慌てて頭をさげるアスカ

勿論頭の上に乗っていたホロフィーは落ちそうになり、慌てて羽ばたく

その姿を見て、マリクはつい嘖きそうになる

「いや、気にするな、冗談だ…それと、お前に渡すものがある」

マリクは服のポケットから一枚の紙を取り出す

その表情はさっきまでの笑みとは一転、真剣な表情でアスカをしっかりと見据え、アスカに差し出す

それが何なのか：アスカはマリクの表情から理解できる

「ありがとうございます…」

「二学生に上がって間もないが：これから先のことを考えるべきかもしれないな…」

「はい…」

マリクはそれだけを伝えたと踵を返し、医務室から出て行く
アスカはホロフィーと二人取り残され、自分が寝ていたベッドの上
に腰を下ろす

「ねえ、ホロフィー、先に寮に帰ってていいよ？」

「そんな！！私はいつでもアスカさまのそばに！！」

「今日は久しぶりに世界樹の観測に行きたいって考えているんだ♪
だからホロフィーと一緒に見たいから、晩御飯の準備と世界中の前
で取る夜食を作ってくれない？一流のメイドさん♪」

「はい！！！！！！」

アスカの『帰っていいよ』という言葉に、ホロフィーは反論しよ
うと考えたが、アスカの満面の笑みを見て、ホロフィーは安心した
のか、元氣よく頷き、アスカの頭の上から飛び立ち、医務室から出
て行った

そんな後姿をアスカは手を振りながら見送り、ホロフィーが出て
行ったことを確認するとアスカの表情から、完全に笑顔が消える

「あはは…ついに言われちゃったなあ…」

窓から差し込む赤々とした夕陽が俯くアスカの顔を照らす…

それは、照らしてはいけないものだった
アスカの頬を伝う止め処ない涙
泣いてはいけない…そう思っても抑制できなくてただ流れる

「でも…悔しいな…」

アスカもそこまでバカでもないし、子供でもない
マリクが言いたいことも理解できた

このまま先、この魔術や剣術を駆使する騎士や傭兵の道を進むと
すれば、今のままではたどり着く前に潰れるか、運良くつけたとし
ても早い死を迎えるから…

そうなる前に忠告してくれたマリクなりの優しさ、大人としての
助言

ああ…理解できる

でもやっぱり理解は出来ても納得は出来ない、いや、したくない
だけ

【挫折】

この書くには簡単だが、簡単には受け入れられない言葉
それが今、アスカの頭の中に湧いて出るように浮かび上がる

「うあああああああああああああつ!!!!!!!!!!」
「!!!!!!!!!!」

アスカは思考を振り払うように立ち上がり、壁を思い切り殴りつ
ける

拳に響く痛みより、今は心に響く痛みだけが、アスカをどんどん
苛んでいく

深夜になり、アスカとホロフィーは人影も何もない橋の中心にある世界樹のある広場へと来た

アスカは深夜にこの世界樹の下まで来るとこの王都にきたときのことを思い出す

その光が世界樹の周りを踊るように発光する姿が、綺麗ではじめて見たときは感動して、魅入ってしまったくらいだ

そして、ホロフィーにもこの世界樹で出会った

そう、この世界中はアスカにとってすべての始まりと言える

「さて、ホロフィー？観測器具を設置しようか♪」

「はい！！アスカさま！！」

鞆から折りたたみ式の地面に刺すタイプの避雷針に似た観測器具を二手に分かれて、世界樹を囲むように設置していく

その観測器具、計測器には特定の周波数で繋がっているため、アスカの服のポケットに入っている計測器に数値が表示される

ちなみにこれを買うために、学校に隠れて、商業区画でバイトをしたことも一つの思い出である

「さて…もし発光現象が起きるなら数値に反応があるはず…」

アスカは自分の持っている最後の観測器具を地面に刺すとポケットから計測器を取り出だそうとして、一度ポケットの中に戻る

アスカは世界樹を見上げ、苦笑いを浮かべる

「これで見納め…だね…最後くらい…発光してくれると嬉しいな…」

アスカは自分の気持ちに決断をくだした

後悔がないといえば嘘になる

でもこれ以上自分に進歩がないなら…今まで見てくれた教官に、あんな辛い発言をさせてしまうのなら…とアスカは退学し、故郷に戻る決意を決めた

アスカは目を瞑り、深呼吸をして、ポケットの奥に引っ込めた計測器を取り出す

「最後まで、僕の望みどおりに…」

アスカはゆっくりと瞼を開くとため息をつく…

表示された数値は【0】

つまりは発光現象が起こらないということを示している

発光現象が起こるのは一日決まって今の時間に起きている

「やっぱりマナの枯渇が近づいてきているのは確かなのかもね…でもまだ枯れていない所を見るとマナは尽きていないはずだからわずかな発光は出来るはず…」

アスカはまた深いため息をつき、鞆のある方向へと歩みを進める
だが…

『待っていたわ…世界に愛された者…』

脳内に直接響くような静かで綺麗な女性の声…

「ホロフィー？」

思わずアスカは周りを見渡しながら、ホロフィーに声をかける

「今設置終わりましたよお！！アスカさまあ！！！！」

ただ…今のホロフィーの発言を考えると、さっきの呼びかけはホロフィーでないことは確かだ

もちろんそこでアスカの頭の中で疑問が浮かぶ、『じゃあさっきの呼びかけはだれだったのか?』という疑問が

「アスカさま?」

ホロフィーがキョトンとした表情でアスカを見据える
アスカは腕を組み、記憶を引き出す

「さっきの声…昼間にも聞いたような…」

「声? 声ってなんですか? ご主人様?」

ホロフィーはアスカの頭から降りるとアスカの顔を見据えるために、アスカの前で滞空飛行をする

「ああ…昼間にね…【貴方を待っていた】…って聞こえて…それに、今さっきは【待っていたわ…世界に愛された者…】って聞こえてさ…ホロフィー何か言った?」

アスカの答えを聞くと同時に一瞬、ホロフィーがビクツと何かに反応したように見えた

「気のせいだと思いますよ♪アスカさまは今日疲れてるんですよ♪」
「かもね? じゃあしばらく世界樹を見つめながら夜食を取ろうよ♪」
「待ってました!! ご主人様♪今日はご主人様の大好きなたまごサンドですよ♪」
「それは楽しみだね♪」

でもアスカはホロフィーの今の態度を見て、それは気のせいなのかも…と疑問を振り払い、二人で鞆のあるベンチの方へと向かう

最後に世界樹の前で食べるご飯：最後まで笑い顔でいようアスカはそう決めていた

だが：

「えっ：」

アスカは一瞬何が起きたのか：理解が出来なかった

振り返ると眩い光を世界樹が発していた

アスカがこの王都に来て一度も見ることがないほどの光を発している

「すごい！！！！すごいよ！！！！この発光現象！！！！」

それがアスカにとって嬉しくて、感動して、飛び上がるほど歓喜した

だが、そんな感情はそこまでだった

その後異変を感じた：

どんどん風が巻き起こったり、炎がひとりでに点いたり、地面から岩が突然隆起したり、世界樹を囲むように水流の壁が出来たり、急に冷気が漂ったり：

「え？光がどんどん収束して：る：？」

そして、五つの球体へと収束していく、一つは炎を纏っている、一つは水流を、一つは風を、一つは土を、最後の一つは冷気を：アスカの表情はどんどん困惑していく：

『私は貴方と共にいる：私の名は』

冷気を纏った球体が、アスカの体にどんどん近づいていく

そんな困惑しているアスカを庇うようにホロフィーが前に立つが、ホロフィーは風の球体が発生させる風の檻に包まれ、意思とは関係なく、アスカから引き離される

「ホロフィー！！！！！！クソッ！！！！！！ホロフィーを離せ！！！！！！！！！！」

ホロフィーを捕縛した風の球体に向かって、アスカは殴りかかった
だが、無情なことにも、軽く回避される…そして、次の瞬間…

「なっ！！！！！！？体が…動かない…」

アスカの体は凍りついたように動かなくなり、冷気を纏った球体
とアスカの体は接触する

そして、最後に聞こえた声は…

『セルシウス…貴方はこれから私のマスターよ…』

廻り始めた運命の齒車 後編

「う……あ……」

どうやら、意識を失っていたらしい……

アスカは上手く回らない思考を強引にめぐらせ、何が起こったのか、体を起こして周りを見回す

そこで、やっと何が起こったのかを思い出す

「ホロフィー……!! ホロフィー……!!……!!」

アスカは立ち上がり、周りを見渡す

すると、出会ったときのように世界樹の下で安らかな表情で眠っているようだった

「ホロフィー……!! よかった……!! よかった……!!……!!」

アスカは慌ててホロフィーに近づき、優しく抱きしめる

その瞬間、ホロフィーがアスカの胸に顔を埋めてきたことを確認すると、心の底から安堵の息を吐く

アスカはそれから、何も見逃さないように慎重に周りを見渡す
だが、何も変わりはないかった

視線の先には発光現象も起こっていないただの世界樹

何も聞こえない、静かな空気だけが流れている

あれだけの暴風が吹き荒れていたのに、地面に設置していた観測機器は何もなかったかのように設置した場所から一ミリも動いた形

寮につくと、アスカは自分のベッドの上にホロフィーを寝かせるとホロフィー用の毛布をかけてあげる

アスカはそれからまたこっそりと寮を抜け出そうと考える

何せ、寮は基本的に深夜は寮内を教官たちが交代制で巡回していたりする

アスカはそんな教官に何度か捕まったことがあるのだが、ほんとはあのお説教だけは勘弁して欲しいと今でも思っていたりする

だが、今日は様子がおかしく感じた

「ん？なんでこんなに騒がしいんだろ…？」

アスカはこっそり少しだけ扉を開き、耳を澄ませる

「教官！！！！リチャードは無事なんですか！！！！？」

「大丈夫だ！！今陛下を守りに学園の教官たちも向かっている！！！」

走るような足音

聞こえる声が近づいてくる

「（この声は…マリク教官とアスベルくん？）」

アスカはコソツと扉の隙間から覗いてみるとマリクとアスベルが走り去っていくところがちょうど見えた…表情までは見ていないが、声質からしてかなり慌てているように聞こえた

聞こえた単語を頭の中で思い返してみる：

「（リチャード…陛下の名前で…無事なんですか？…ということは命の危機に晒されている？）」

そこで合致する

リチャード陛下の命が狙われているということ

アスカはゆっくり、ホロフィーを起こさないようにベッドが置いている側にある窓から下を覗き見る

数名の教官たちがチームを組み、王城区画の方へと向かっている
ということは…

「この騒ぎは嘘じゃないってこと…じゃあ今…」

アスカは腰に翼の装飾が施された柄の両刃剣と翼の装飾が施されたガントレットを装着して、ドアノブを掴んだところで、アスカの動きは止まる

脳裏によぎったのは夕方に聞いた教官の言葉…

そして、無力な自分がそんな場所に行っているのか？そんな自問
自答を繰り返す

自分に何が出来るのか？

「僕は…」

アスカは一度扉を閉めるとその場に座り込む

頭によぎったのは同じ時期に孤児院に入った幼馴染の女子二人に
語った夢

いつかは世界を守れるような人間になりたい

大事な人たち、仲間、お世話になった人、困っている人たちをすべて守りたい!!

そう語ったこと…それが頭の中によぎった

でもどうだ…

今の自分は誰かを守るどころか自分を守る力もない

「迷わずいくのですうゝアスカさまぁ〜♪」

そんな時だった…

アスカは背後から聞こえたホロフィーの声に驚く

彼女はまだ寝ている…なのに…

いつもアスカのことばかりを考えて応えてくれる自分よりもアスカのことを一番に考えて…

そして…いつも…

「そうだね…ホロフィー…」

背中を押してくれる

アスカは立ち上がると思いい切りドアを開け、飛び出す

「さあ!! 頑張るのです!! アスカさま!!」

そして、そんなアスカの後姿を見守るようにベッドから起き上がるホロフィーはただ見つめる

「世界樹の根元に王城に侵入する場所があるとか…でもいつも行ってるけどそんな場所は見当たらなかったし…」

学生寮を離れ、一般住民たちが住んでいる住宅街を抜けると橋に差し掛かる、そこでアスカは壁に背中を預け、コソツと世界樹の方を覗き込む

視線の先にはアスベルとマリクの二人が王城の方へと駆けていくのが見える

二人は息切れしている様子も見せない

それを見るだけで自分との性能の差がみにしみてわかる

だが、今はそんなことは関係ない

二人が見えなくなると同時にアスカも動き始める

「さて…どこを探したものか…」

アスカは橋を渡り終え、世界樹のある広場に着くと息をゆっくり整えながら、世界樹へと近づく

広場にあるのは世界樹を囲むように設置してあるベンチ

世界樹の周りには草花が咲き誇り、綺麗な場所である

「こんな場所に入り口なんて…」

アスカは世界樹に近づき、右手で世界樹に触れようとするその瞬間だった

アスカの右肩に氷の結晶を模った紋章が浮かび上がり、アスカの体が、光に包まれる

アスカは目を瞑り、光を遮るかのように手を顔の前に出す

そして、光がだんだん収まっていくのを感じると瞼を開く
その瞬間、アスカは完全に目の前の景色に圧倒される：

「嘘でしょ……」

アスカの視界には水の都をイメージさせる地下遺跡と呼ぶに相応しい場所が広がっていた

今自分のいる場所は一直線に遺跡へと繋がる橋の上

アスカは本来の目的を思い出し、そのまま遺跡に向けて走る

「はやく行かないと……」

橋を抜けると、入り組んだ階段を登り、遺跡内に侵入する

遺跡の入り口には水を纏う綺麗な女性を模した石造や猛々しく炎を操る獣の石造、風を纏う少年の石造、隆起する岩石の中に佇む獣の石造、氷の中で美しく存在する女性の石造が並んでいた

アスカはそんな石造に見とれていた

美しい……そう思いながら、石造一つ一つに触れる

ただ……その時だった

「グルウウウウ……」

獣のような鳴き声が、近くから聞こえてくる

アスカは剣を抜き、構える

どうやらこの遺跡には魔物が住んでいるということをアスカは理解した

「落ち着け……落ち着け……」

アスカは暗示をするように呟きながら、ゆっくりと歩みを進める

検定テストの時のようにスポーツのようなバトルではない…これは実戦、油断すると同時に死にいたる

ホールのように広い部屋、中央には燃え盛る炎の祭壇があり、その周りには石造が立てられていたのだろう…それが崩れ、障害物となり、どこから攻めてくるかわかりづらい場所

アスカは左側の壁を背に向け、端を移動する

これなら一番の死角でもある背後は守れる

警戒するのは右、左、前、上

アスカは道を確認しながら、ゆっくりと進む

「道は左と右…どっちが本当の道なのか…賭けかな…」

そうしているうちに左の先に進む道に近づく

アスカはこのまま進もうと考えていたその時だった

「グオオオオオオオオオオ!!!」

アスカは慌てて振り返ると、祭壇の上から飛び掛ってくる獣型のモンスター ウルフが飛び掛ってきていた

アスカはそれを前に飛び、何とか回避すると剣を構えなおす

「素早い!!! 蒼破刃!!!!」

アスカは態勢を整えると同時に、下段から上段に向けて素早く振りぬき、弾丸のような衝撃破をウルフに向けて飛ばす

「キャン!!!!」

「グオオオオオオオオツ!!!!!!!!!!」
「っ!!!!!!!!!! やってやる!!!!!!!!!! 孤月閃!!!!!!!!!!」

ウルフの牙はアスカに届くことはなく、そのまま、アスカの剣にかかり、絶命した

「っは！！！！一戦だけでこれだけ疲れるなんて……」

ただアスカは一度振り返り、ウルフの死骸に『ごめんね…』とポツリと呟く

自分の命を守るためにはいえ、命を奪ってしまった

アスカはそれを重く考えながらも、今は前へと進むことを決意して、ウルフの死骸にまた背を向ける

[illegible]

そこは王城區画にある城の中

いつもなら王の風格を體現している莊嚴な雰囲気を醸し出す廊下

だが…

「つまらないわね…もつと力のある人間はいないのかしら…」

そこにいつもの王の風格を體現している雰囲気は存在していない
壁や窓には血が飛び散り、床には事切れている騎士甲冑を纏う人
間が無残に転がっている

そんな中一人、死体を気にする様子もなく、ただつまらなそうに
歩く、赤髪セミロングヘアの身長は小さめだが、バランスの取れた
体型をしている幼顔の少女

黒のノースリーブのへそが出る程の短めの長けの服に黒のショーツ
パンツ、赤のニーソックスを履いた服装をしている

「敵はこっちだ!!!!!!」

少女はどこからか聞こえてくる、自分を探す声に歓喜し、口元が
裂けるように吊り上げる

左腕に装着している獣のように鋭い爪が目立つガントレットを装
備し、右手には血に濡れた野太刀を握り、血振りをしながら振り返る

「今度こそあたしを楽しませなさいよね…」

つり目気味の目で見開き、ゾロゾロとこちらに走ってくる騎士甲冑を来た人間に向かって駆ける

少女に向かって駆けてくるハルバートを装備した騎士甲冑の人間は約10人

対して少女は仲間も何もない唯一人：

「相手は一人だ！！行くぞ！！！！」

部隊を率いる先頭に立つ、黒の騎士甲冑を纏う人間がそんな言葉を味方を鼓舞するために叫ぶ

だが、その瞬間、頭から冷水をかけられたように一瞬のうちに表情からさっきまで浮かべていた邪悪な笑みが消える

「なあゝんだ：カスか：」

少女は立ち止まるとため息をつき、野太刀の構えを解く

その瞬間、完全に黒の騎士甲冑の人間は、大振りにハルバートを振りかぶり、そのまま振り下ろす

そして、決着は一瞬だった

互いに交差し、最終的に歩くように通り過ぎていく

そして、人間が床に倒れたような音が鳴り響く

大勢が倒れるような音が：

「つまらなすぎるわ：」

蔑むような冷たい視線をさっき襲って来た騎士甲冑の人間たちに向ける少女

見える

祭壇があった部屋から左の入り口に入り、進んだ結果、アスカは階段を見つけ、さらにのぼり、二階層にたどり着いた

ただ、そこから問題だった

魔物は少しずつ減ったものの、遺跡に仕掛けてあった罠が大量に蔓延っていた

アスカ自身、今まで回避してこれた危機感知能力に少しだけ感心する

「でもこの先どうしよう…ここにこれたってことは出口もあるはずだし…」

アスカは一度、休憩する前に一通りこの階層を見回っていた
だがあったのは小部屋が集結している中央に噴水のようなオブジエのある広場を思わせるような広間、その先にあるのは十字路で分かれ、その分かれた先には最初に遺跡に入ったときにあった石造が一つずつ置いてある大部屋

そう…完全に行き止まりだったのだ

アスカはそれから祭壇のある部屋まで戻り、右の方の入り口にも行ってみた…

だが、その先には左の入り口の方と同一ような造りになっていた
どうやらこの遺跡は昔の人の居住区のようなものだったのか？とアスカは想像してみた

もしそうだとすれば、出口がないという可能性も出てくる
だが、じゃあ何故地上にいた自分はここにいるのか？という疑問

も同時に出てくる

「んゝ…思い出せ僕…思い出せ…」

アスカは腕を組み、思考をめぐる

ここに来た時、不思議な光に包まれたように思えた

そして、気がつけばアスカはこの地下遺跡に来ていたのだ

「なんで…僕そんな術は使えないし…あるなんてことも聞いたことないし…」

だんだんと焦りと苛立ちで思考が上手く回らなくなってくる

冷静にならないと…冷静にならないと…と考えるだけでも逆効果ばかりを与えてくる

「ああゝ!!!!!!もう!!!!!!人の命が懸かってるのにこんなところで足止めなんて!!!!!!」

アスカは一人苛立ちから叫ぶ
もちろんそんなことをすれば…

「グルウウウウウウ…」

どこからともなく小部屋に侵入してくるウルフ2匹

それに気づいたアスカは驚き、頭の中が真っ白になりながらも、
2匹同時に飛び掛ってくるウルフを何とか前方に態勢を低くして飛ぶことにより、何とか回避

「っ!!!!!!」

体力がまだ回復していないせいなのか、無様にこけながらも立ち上がり、部屋から飛び出す

そこでアスカはやっと気づく…

「嘘でしょ…」

獣のようなうめき声と共に一階層へと繋がる階段から上ってくるウルフの群れ…

アスカはそれを見た瞬間、今いる広間から、奥のほうへと逃げるために走り始めた

情けない思いながらも、今ここで死ぬわけにもいかなかったため、大部屋へと繋がる通路へと入っていく

壁にはいろんな壁画が描かれているが、今は見ている余裕はない

「ああ…もう!!!次は…」

アスカは視線の先に見えてくる十字路を見据えながら、どこへ進むか迷ってしまう

アスカは振り返り、背後を確認すると、大量のウルフたちが駆けてくる

獣の方が、勿論脚力はあるため、どんどん差は縮んでいく

「どの部屋が1番広かったかな…えと…えと!」

焦って焦って思考が上手く回らないうちに、十字路にあと数メートルで差し掛かる…

『右に曲がって、そこに私の像があるわ…』

その時、アスカの頭の中に声が響き渡る

だが、今は気にしている余裕がないアスカはただ言うとおりに右に曲がり、大部屋の中に入ると異変を感じた

「なっ！！！！ふあっ！！！！？」

アスカは何かにすべり、そのまま転倒し、美しい冷気を纏う女性の石造の前まで滑っていった

何が起きたのか理解できず、アスカは顔を上げるとさらに咄然とする

「えっ…なんで…」

アスカの視線に広がるのは大量のウルフたちが完全に凍りつき、入り口を塞いでいたのだ

その上、部屋は氷柱が隆起し、完全に凍り付いている

アスカは自分もあんなふうに少しずつ凍り付いているのではないかと慌てて、自分の体を見下ろすも、自分の体に異変はない

『貴方は私と契約している…私が中にいる以上、冷気の影響は全くないわ…』

そこでアスカはやっと落ち着いたのか…自分の中の異変に気づく…

「えっ…なんで頭の中に当たり前のように声が…」

アスカは体を起こし、あたりを何度も何度も見回しながら、誰か人がいるのかを確認する

だが、誰もいない…

『はあ…私のことを受け入れられない気持ちもわかる…でもいい加

減認めたらどう?』

でもちゃんと聞こえていた…世界樹の前で聞こえた静かで綺麗な女性の声が…

その声の主の言葉に、アスカは俯き、黙ってしまふ

アスカは思い返してみる

マリクとアスベルの後を追って出てきたとき、世界樹の前で浮かび上がった右肩の氷の結晶を模したような紋章

元々そんな刺青いれずみが入っているわけもなく…それが意味しているのは一つ

自分の中に何かがいて、夢だと思っていたあの出来事は夢ではないということ…

その瞬間、アスカの目の色が一瞬のうちに変わる

「そっか…じゃあ…!!」

アスカは鞘から剣を抜き、自分の体を貫こうとする…だが…

「なっ!!!! 体が…」

『まったく…なんのつもりよマスター?』

いくら力を込めようと全く、自分の体に刺さるか刺さらないかの寸前で止まり、動かなかった

驚愕しているアスカを余所に、声の主は呆れたような声でアスカに話しかける

だが、アスカ自身にも譲れないものはある

「僕の大切な友達…ホロフイーにあんなこととして…僕は許さない!!」

アスカは必死に叫ぶ

自分の大切な友達を傷つけようとした奴らを許せない、アスカは今まで上げたことのないほど大きい声でただただ叫ぶ

『そうか…あの子も愛されたものね…でもいいの？貴方は目的があるでしょ？ここで死んでもいいの？』

「っ…」

アスカは苛立ちで冷静さを完全に失っていたため、最初の目的を忘れかけていた

「でも…こんな状態じゃ戻れない…だったら…」

そう、今の現状は完全に詰んでいる

あたりを見渡しても部屋は完全に凍り付いているだけで、今背にしているのは美しい冷気を纏う石造

出ていこうにも、凍りついたウルフたちが邪魔をして、出るに出られない

『冷静になりなさいマスター…最初に入ったときに私の石造があっただけで何もなかった部屋が何故今こうなっているのか？キーは【精霊】【私】【肩の紋章】よ…』

アスカは頭の中に響き渡る声に渋々従い、キーワードを頭の中に浮かべる

その瞬間、硬直していた体は何もなかったかのように解け、アスカは剣を鞘に収めると考え始める

「まずは…一つ目のキーワード…【精霊】仮定だけど…あの石造が精霊とするなら炎の獣がイフリート…水の女性がウンディーネ…風

の少年がシルフ…土の獣がノーム…」

アスカは早く地上に出ないという気持ちで必死に頭の中を回転させる

声の主が出したヒントは【精霊】 【私】 【肩の紋章】

残りのワードは【私】 【肩の紋章】だ

「その仮定で考えるなら…【私】の答えは…この石造は君…セルシウス…だよね…それに今僕と意識を共有していると仮定して、この現象が起きたと考えると…僕の中に君がいて…」

アスカは認めたくない思いながらも、声の主であるセルシウスの石造を見上げる

「【肩の紋章】ということはもしかして…」

アスカは凍りついた床で滑らないように慎重に慎重にと歩き、セルシウスの石造の右肩をみる
するとそこには…

「僕の右肩にある紋章と同じ…」

アスカは右手でセルシウスの石造の右肩を触れようと手を伸ばす…
そして、触れた瞬間…

『当たり前よ…マスター…』

アスカとセルシウスの右肩の紋章が輝き始め、アスカの体は光に包まれた

あまりのまぶしさに^{まぶた}瞼を閉じたアスカだったが、光が収まったこ

とに気づき、瞼を開くと目の前の景色は：

「ほんとに…来れた…」

荘厳な雰囲気醸し出している見たこともない部屋が視界には広がっていた

いかにも高級そうな作りの暖炉

見たこともない王子や姫様が使っているようなイメージをさせられるベッド

カーペットや窓際にある机や椅子も何もかもが高級感を醸し出している

『さて…行きましょマスター？』

「うん…」

アスカは部屋から出るために扉を開いた瞬間、あまりの光景に嘔然とした…

目の前に広がるのは血に濡れた壁や窓

床には事切れた騎士甲冑を纏う人間の死体

死体特有の鼻に衝く死臭

あまりのショッキングな光景にその場で蹲り、嘔吐してしまう…

『大丈夫？ マスター…』

「う…うん…」

アスカは立ち上がり、はじめて見る戦いの跡にショックを受け、涙を流しながらも前に進む

体は震え、ゆっくりトボトボと歩きながらも、しっかりちゃんと前には進む

『何故そこまでして、助けにいくのよ？』

「何故って：僕もわからないよ：」

アスカは涙を拭いながらもただ、前を向き、歩みを進める

「でも：偉そうな夢を持っているわりに：僕は何も出来ない：そんな自分が嫌だから、大切な人を守る力を手に入れるために：何も出来ない自分を変えたくて：この王都に来た：」

何故今ホロフィーを傷つけようとした奴に話しているのかはわからない：

でもアスカは無意識に今喋っていた

「今僕が行っても何も出来ないのはわかってるよ：ろくに中級魔法も使えないし、奥義もない：そんな僕が何か出来るなんて思えないよ：」

だんだん、自分の気持ちが雪崩れのように出ると同時に、ボロボロとだんだん視界が霞むくらい、涙が流れてくる

そして、ただ壁に手をつき、ゆっくりゆっくり廊下に横たわる死体を避けながら歩く

『ならば逃げればいいじゃない：』

そんなアスカにただ静かにセルシウスは一言いう

『逃げればいい：』セルシウスのこの言葉を聞いた瞬間、アスカは立ち止まり、涙を拭う

セルシウスの言葉はもつともだ：

弱い自分が行っても迷惑をかけるだけだ：

逆に足手まといになるかもしれない

逆に陛下やマリク、アスベルを危険に晒すかもしれない：
でも：

「理屈で納得できたら：僕は今ここにいないよ：」

アスカの頭の中に一瞬ホロフィーの顔が浮かぶ

王都に来て、学園に入学して今までお世話になったマリクの顔も
浮かぶ

検定テストの時、優しげに笑うアスベルの表情が浮かぶ

アスカは大きく深呼吸し、グッと拳を握り、前を見据える

憎い相手に反論したいだけなのかもしれない：逃げればいいとい
われて癪にさわったのかもしれない：ホロフィーに背中を押された
分後に引けないのかもしれない：

でも今自分の心にあるこの気持ち：

「ここで逃げたら王都に来た意味もないし、今まで胸に抱いていた
想いがすべて嘘になる：やっぱり僕は守りたいんだよ：誰かが苦し
むところなんてみたくない：自分で出来る範囲：ううん：やれなく
ても僕の近くでそんな人がいるってわかったら救いたいよ：」

守りたいという気持ちは嘘ではない

気づけばアスカは震えも止まり、涙も止まり、廊下についている
足跡を追って走り出していた：

『そうか：』

ただ『そうか：』という一言

だがアスカの頭の中に響き渡った声は今までセルシウスの声の中
で1番優しげな声だった

「墮ちろカス！！！！もうしゅうけん猛襲剣！！！！！！」

少女はそのままの態勢から、片足で上に飛び上がる力を利用し、下段から野太刀を振り上げる

小柄の少女だったということでマリクは体型の差のおかげでそこまで態勢を崩すことはなかったため、片足で地面を思い切り蹴り、後ろに飛び退き回避する

「あまり僕たちをなめない方がいい！！！！聖なる槍よ！！十二の証と共に貫け！！ホーリーランス！！！！！！」

後方から術式の詠唱をしたりチャードが少女に向けて手を翳した瞬間、一本の光の槍が少女の足元から隆起する

「ちっ！！！！鬱陶しいわね！！！！！！」

少女は後ろに飛び退き、野太刀でホーリーランスの一発目を切り裂く

だが、その瞬間、少女の真上から十二本の光の槍が囲むように現れる

「くっ！！！！」

少女は驚愕しながらも、何とかさらに後ろに飛び退き、ホーリーランスを回避する

少女の表情はさっきまでとは違い、だんだん表情に苛立ちの感情が浮かんでくる

少女は一度距離を取り、一度呼吸を整えようとする
だが：

「態勢を整えさせる暇は与えん!!!!」

少女は目の前に存在する炎の球体に気づいた

「其は耐え無き息吹!!!!! フォトンブレイズ!!!!」

そのときには既に少女は回避行動に移れないところまで来ていた
そして、マリクの放った炎の球体はどんどん圧縮するように小さくなり、小規模な爆発が起きた

「ああああっ!!!!!!」

その爆発でダメージを受けた少女は爆風により吹き飛ばされる

そこで何とか態勢を整え、床に着地し、少女は野太刀を構えなおし、視線を三人の方に向ける

だが…

「これで終わりだ!!!!」

「なっ!!!!!!」

少女の目の前には飛び上がり、左で腰に携えていた鞘を掴み、右で抜いた剣を片手で振り上げたアスベルがいた

器用に片手で峰に返し、そのまま少女に上段から袈裟斬りの要領で振り下ろす

「雷斬衝!!!!!!」
らいざんしゅう

「うああああああああああっ!!!!!!」

その瞬間、アスベルの袈裟斬りと同時に聖なる雷が発生し、それが見事に少女にヒットし、少女はその場に倒れこむ…

「さあ、お前の目的を話せ！」

アスベルは剣を倒れている少女に突きつける

少女は顔をあげ、アスベルを見上げる

アスベルの真っ直ぐな視線が自分の惨めな姿に降り注ぐ

「氣に入らない…こんなカス共にこれを…これを…」

苛立ちを覚えながらも、首からさげている黒の宝石のネックレスを右手で掴む…

「アスベル！！離れろ！！」

マリクが叫ぶと同時に少女は右手に力を込め、ネックレスの鎖を引きちぎる

そして…

「すべてを壊してやるわ……」

「ぐあっ！！！！？」

少女の周りに衝撃波が生まれ、アスベルは吹き飛ばされる
吹き飛ばされたアスベルをマリクとリチャードは受け止める

「大丈夫か！！アスベル！！」

「ありがとうございます教官…リチャード…」

少女はゆらりと立ち上がり、野太刀を構える

さっきまでの苛立ちの表情は全くなく、逆に静かで不気味な雰囲気
気が流れ出ている

「まずいね……マリク……アスベル……僕を見捨てて」

「それ以上は言わせない：俺はお前をちゃんと守る！！」

リチャードの言葉を遮るようにアスベルは真剣な表情で言葉を言
放ち、リチャードの前に立ち、剣を構えなおす

「そうですよ陛下…俺たちは陛下を守るためにいるのです…」

マリクも投刃を構えなおし、リチャードの前に立つ

二人とも守るといふ気持ちを胸に、目の前の少女と再び戦う決意を固める

そんな二人の姿に、リチャードは自然と笑みが浮かび、装飾の施されたレイピアを構えなおす

「ありがとう…アスベル、マリク…」

「行くぞ!!! みんな!!!!」

アスベルの掛け声と共に三人同時に少女に向けて駆ける

目の前にいる少女に勝つために……自分たちの大切な物を守るために

[illegible]

「まいったよ…」

アスカは血のついた足跡が途切れ、王城の中で迷っていた
場内は静かで、今本当にバトルが繰り広げられているのか、そも
そも侵入者なんているのかわからないため、位置がつかめないの
である

『この状態だとしらみつぶしに探すしかないでしょ…』

「わかってるよ…そんなこと…」

アスカはため息をつき、廊下を歩く

今いる場所は戦闘の痕跡もなく、王城らしい綺麗に整った場所だ
った

高そうな壺や絵画が飾られてあり、触れることすら恐ろしく思え
てくる

「この部屋はっと…」

アスカは近くの扉を開けてみるとそこはどうやら客室のようなも
のようだった

『やってることは盗賊とかわりないわね…』

「しらみつぶしていったの君でしょ…」

サラッと今の状況を客観的に見られると思うのかという
事実をそうするように伝えた人物であるセルシウスに言われてしまう
勿論アスカは若干イラッときたため、それをツツコミを入れてみる

『……………』

「無視って…」

だが、遠慮なしの無視が入る
アスカはため息をつき、開けた扉を閉める

「そのお前！！何をしている！！」
「ヒャワッ！！！！！！？」

すると、ベストなタイミングで背後から声が掛かる
アスカは恐る恐る冷や汗を流しながら、振り返る
勿論そこには騎士甲冑を纏う衛兵さんがハルバートを持ってそこ
にいるではないですか

「あの…その…僕は…えと…」

アスカは苦笑いを浮かべながら、今、頭の中で必死に言い訳やこ
の場を切り抜ける方法を考える

だが、勿論普通の一般学生がこの場所にいるということ自体おか
しい…

アスベルみたいに騎士団のスカウトを受けていたりしていない限
りは…

「怪しいな…お前が侵入者か！！！！！」

「ヒィッ！！！！違いますよ！！いや…違わないかもしれませんがど
…」

急にハルバートを突きつけられ、本気でビビってしまうアスカ
全身の毛穴から汗が吹き出るような気持ち悪い感覚がつきまとい、
だんだん頭が回転しなくなってくる
だが、幸か不幸か…

「なっ！！！！何なんだ！！！！あれは王の間の方か！！！！」

騎士甲冑を纏った男はハルバートを引っ込め、窓の方へ振り返る。

窓から見えた遠くから見ても大きいホールのような部屋が発光し、爆発したところを：

「もしかして…」

『ああ…ビンゴかもしれないわねマスター…』

気づくとアスカはその方角へ向けて走り出していた

「あっ！！お前待て！！」

「今はそんなことしている場合じゃないでしょ……!! 早く貴方もあそこに一個小隊向かわせて……!!」

いつもならそんな声は人に対して出せないだろう……

でも今は命が掛かっている

無意識だろうが、アスカは重く考えて分析して今出来ることをやろうとしているのだろう

そして、今からアスカは戦場へ…運命の歯車へと突入しようとする

[illegible]

「ぐっ…あぁっ…」

「っ…」

「くそっ…」

さっきまで優位に立っていたアスベルたちは地に伏せていた
莊嚴な雰囲気醸し出していた王の間は見る影をなくし、廃墟の
内装に近い破壊された雰囲気を表していた

そんな中、一人少女は冷たく三人を見下ろし、リチャードに歩み
寄ると髪を鷲掴みし、持ち上げる

「ぐぁっ！！！！」

「やっと聞きたいことを聞けるわ…お前は【代行者】のことを知っ
てる？」

リチャードの表情は苦痛にゆがむ

だが、少女の問いかけに関してはリチャードは全くわからなかった

「知らない…だがもし、知っていたとしても…君に教える義理はな
いな…」

リチャードは不敵に笑い、少女に言放つ

そのリチャードの姿を見た少女はさらに冷たい表情を浮かべ…

「嘘じゃ…ないわよね！！！！」

少女は野太刀を振り上げると、その切っ先をリチャードではなく、
アスベルの腕に突き刺す

「ぐあああああああああつ!!!!!!!!!!!!!!」
「アスベル!!!!!!!!!! やめてくれ!!!!!!!! やるなら僕をやってくれ!!!!!!!!!!」

アスベルの腕から野太刀を引き抜くと、血がアスベルの白のコー
トを汚すように広がっていく

アスベルの苦悶に歪む表情を見て、リチャードの表情は一気に悲
しみの色を帯びる

「そんなことはどうでもいいから…早く言いなさいよカス…」
「グハッ!!!!!!!!!!」

だが、少女はそんなリチャードの様子など気にする様子もなく、
リチャードの腹部を思い切り蹴り飛ばす

「ほんとうに……僕は知らないんだ……」

リチャードは苦痛を我慢しながらも、少女の問いかけに応える
その瞬間、少女はため息をつき、リチャードの髪を掴んでいた手
を離す

「じゃあもういい…お前たちを消す…バイバイ…陛下とその他…」

少女は野太刀を構え直し、その場で飛び上がる
そして、そのまま思い切り三人へと野太刀を振り下ろす

「消えろオオオオオオオオオオオッ!!!!!!!!!!!!!! 爆砕ざ」

「蒼破刃!!!!!!!!!!!!!!」

「キャッ!!!!!!!!!!!!!!」

だが、その瞬間、少女は三人の目の前から消えた

いや、正確には吹き飛ばされ、地面に倒れ、体を起こし、蒼破刃が飛んできた方向を見ていた

三人は一瞬、何が起きたか理解できなかった

三人も少女が見ている方向に視線を向けるとそこには……

「よかった…間に合ったよ…」

そこに、いたのはいるはずのない、学園でも落ち零れで中級魔術すらも使えない少年

絶対に今の状況には不適應な人間がそこに立っていた

「アスカ……何故お前がこんなところに……」

「その質問は無しの方でお願いします教官……」

アスカはマリクの問いかけに、頬をポリポリとかきながら苦笑いを浮かべる

「なんなんだ……お前は……」

だが、少女が立ち上がると同時に、アスカから笑顔が消える

アスカは本気で蒼破刃を放ったはずなのだ……だが、彼女にはまだ立ち上がる余裕がある

自分の弱さを理解していたつもりではあったが、ここまでとは思わなかった

「なんなんだよ!!!!!!!!!!お前はアアアアアア!!!!!!!!!!」

少女はいいところを邪魔された怒りにより、今までたまっていた

ものが頂点に達し、完全に爆発した

「まずい！！！！逃げろ！！！！アスカ！！！！！！！！」

マリクはアスカを助けるために立ち上がろうとしたが、上手く立ち上がれず、その場に倒れてしまう

アスカは少女のあまりのスピードに驚いた

マリクが逃げろと叫ぶのはわかる

「アスカ！！！！俺たちのことはいい！！！！逃げろ！！！！」

アスベルまで、アスカに向かって叫ぶ

アスベルがあんなに傷を負っている

それを考えるとアスベルに勝てなかったアスカは逃げないといけないのかもしれない

「国民が王のために死ぬなんて許されない！！！！君は逃げろ！！！！」

リチャードの考え方は尊敬できる

自分が死んでも国民は守る

だったら…

「僕は逃げない！！！！！！！！お世話になった教官も！！！！戦った友達も！！！！素敵な王もすべて！！！！僕は守る！！！！！！！！」

アスカは完全に覚悟を決め、腰に携えていた鞘に納まった両刃剣を鞘から引き抜き、構えらるものすごいスピードで近づいてくる少女に向けてアスカも駆ける

「あああああああああつ！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！」

「はああああああああああつ!!!!!!!!!!!!!!」

少女は上段から、アスカは下段から、互いの剣を思い切り振り、互いの剣はギリギリとぶつかり合い、火花を散らす

「っ!!!!!!!!!! 力が強い…」

「邪魔したツケは払ってもらわよ!!!!!!!!!!!!!! 猛襲剣!!!!!!!!!!」

「っあ!!!!!!!!!!」

アスカは押し切られると同時に、少女はアスカに体当たりをぶつける

同時に下段から野太刀を振り上げる

それをアスカはギリギリで両刃剣で防御し、空中に吹き飛ばされる

「待ってたよ!!!!!!!!!! 蒼破刃!!!!!!!!!!」

「っ!!!!!!!!!!」

アスカは空中で下段から片手で持った両刃剣を上段へと振り上げる動作で、衝撃波を少女に向けて放つ

少女は何とか後方に飛び退き、回避する

その姿にアスカは思わず驚いてしまう

『戦いに集中しなさいマスター!!!!!!!!!!』

「っ!!!!!!!!!! ごめん!!!!!!!!!!」

アスカは頭の中に響く、セルシウスの声で集中力を取り戻す
アスカは着地すると同時に、少女に距離を詰め…

「孤月閃!!!!!!!!!!!!!!!!!!」

下段から上段へと円を描くように両刃剣を振る

「っ!!」

少女は野太刀でガードはしたが、アスカの孤月閃により、野太刀を弾かれ、態勢を崩してしまう

アスカはそれと同時に…

「蒼破刃!!!!!!!!!!」

「あぁっ!!!!!!!!!!」

アスカは蒼破刃を少女に直撃させる

すると少女は吹き飛ばされ、王の間の中央で倒れる

「教官!!!!!!!! アスベルくん!!!! リチャード陛下隠れて!!!!!!!!」

アスカが三人に叫ぶと同時に、三人は玉座の影に隠れる

それを素早く確認するとアスカは…

「すべてを守るため、雷鳴を纏いし聖なる雷の剣で、敵を穿つ!!」

「!!!! サンダー……」

少女は体を起こし、アスカの上空に翳す手の上を見て驚愕する

そこには巨大な雷を纏う聖なる剣が確かに存在していた

確かにそれは中級魔法と言ってもいいほどの威厳が存在していた

「ブレード!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!」

「あああああああああああああああああああぁっ!!!!!!」

「!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!」

アスカは上空に翳していた手を少女の方に向けると、サンダーブレードは放たれ、少女の足元に突き刺さる、それと同時に少女を囲うように魔法陣が展開され、一気に放電される

そして、放電現象が終わると少女はその場でまた倒れる

「っは…っ…」

アスカは剣を地面に突き刺し、その場に膝を着いてしまう

『大丈夫!!? マスター!!!』

「大丈夫…だよ…セルシウス…勝ったよ…僕…」

アスカのその姿を見たアスベルやマリク、リチャードも安堵の息を吐き、アスカの方に視線を向ける

だが…

「見つけた…代行者…でもこの程度なら捕まえられる…わよね…」

アスカはその姿を見て驚愕する

狂喜に歪む表情

恐怖を感じさせるようなビリビリと感じる殺気

そう…目の前にはろくにダメージを受けていないさっきまで倒れていたはずの少女が目の前に立っていた

「捕まえた…お前を…ペットにしてあげるわ!!!!!!」

アスカは一瞬何も感じなかった
だが今確実に顔を掴まれている
それどころかいつの間に自分との間合いを詰められたのが理解
できなかった

「えっ…あああああああああああああつ!!!!!!!!!!!!!!」

そして、地面にアスカはたたきつけられる
死なないのが不思議なくらい後頭部に激痛が走り、アスカは意識
が一瞬飛びそうになる

だが、その時、意識が飛んだほうがいいと…

「でも逃げないようにはしないとねえ!!!!!!!!!!!!!!」

「つぐあアアアアアアアアアアアアアアアア!!!!!!!!!!!!!!」
「！」

次の瞬間、心の底から思った
少女は野太刀を振り上げ、それを遠慮なくアスカの足に突き刺す
アスカはあまりの激痛にブワツと目に涙が浮かぶ

「ふふっ…いいじゃないそのそそる表情…」

「うっ…ああ………」

「クソ!!!!!!!!アスカを離せ!!!!!!!!」

倒れているアスカの視界には剣を引き抜き、少女に斬りかかろう
とするアスベルの姿が見えた
だが…

「邪魔!!!!!!!!!!」

「っあ!!!!!!!!!!!!!!」

後ろも見ないで少女はアスカの足から引き抜いた野太刀でアスベルを吹き飛ばす

「ぐおっ!!!!!!!!!!」

アスベルは怪我のせいか持っている剣を落とし、なすすべもなく地面に倒れてしまう

それと交差するようにリチャードも駆けてくる

「これ以上僕の大切な国民に触れるな!!!!!!!!!! 秋沙雨!!!!!!!!!!」

少女は狂った表情のままリチャードの方に振り返る

リチャードは無数の鋭い突きを放ち、少女の背後へと通り過ぎるだが…

「ふふっ…二人目…」

リチャードはなすすべもなくその場に倒れる

最後にその姿を見たマリクは怒りに表情を歪ませ

「クソ!!!!!!!!!! これ以上好きにはさせん!!!!!!!!!! 落凰破!!!!!!!!!!」

マリクの投げた投刃と共に、真空破が発生し、少女に当たると同時に少女は吹き飛ばされていく

だが…

「そんな弱った状態の技じゃ…今の私には効かないわよ!!!!!!!!!!」

「なんだと!!!!!!!!!! ぐおっ!!!!!!!!!!」

吹き飛ばされている途中でマリクの落凰破を跳ね返し、逆にマリクの方が吹き飛ばされた

この時点でアスベルもリチャードもマリクも意識はあるが動けなくなっていた

それを見ていたアスカは立ち上がろうと足に力を込める：

それと同時に激痛が足に走る

でもここで動かなければ三人は死んでしまう

守るために着たのに：何も出来ないで死んでしまう

「二度と：失いたくないんだ：ぐっ：あああああああああ
っ！！！！！！！！！！」

そう考えたとき、アスカは何とか立ち上がる：だが：

「クソッ：なんで：」

その場でアスカはまた態勢を崩してしまう：

こんなところで：僕は終わるのか：アスカがそう思った瞬間：

『マスター：少し身体を借りるわよ：』

自分の意識が遠のいていくのをアスカは感じる

心の奥底に自分の意識が押し込められていくような感覚に襲われる

『だめだ：僕が：僕がやらないと！！』

必死に声をあげようとするが、ぜんぜんでない：

というより、自分が喋っているのか、そうでないのかすらわからない

だが、最後に聞こえたのは…

「私に任せなさい…マスターが大切だと思うすべてと…私が大切に思う代行者であるお前を守ってあげる…」

アスカの意識を心の奥底に追いやり、表に出てきたセルシウスの声だった

立ち上がったアスカの体を借りたセルシウスに全員が視線を集め、驚愕する

アスカと違い、全身から自信に満ち溢れ、妖艶な表情を浮かべ、剣を片手で構える

「アスカ!! やめるんだ!! 今のお前が勝てると」

「全身ボロボロのお前に言われたくはないわね…私は氷の大精霊セルシウス…こんな小娘程度に遅れは取らないわ…」

マリクがとめようとするが、アスカの体を借りたセルシウスはそんなマリクの言葉も突っぱね、足の怪我も気にする様子もなく、歩みを進める

「やっと会えた…大精霊セルシウス…他の精霊も早くゲットしたいとね!!!!!!」

「耳障りね…お前のことより、マスターの体が心配…お前ごとき一瞬よ…」

少女は小さく舌打ちし、一瞬のうちにセルシウスとの距離をつめる少女は両手で野太刀を持ち、スピードに乗せて、そのままセルシウスを貫こうと突進する

だが…

「やはり…人間の身体能力だな…シルフはもっと早いわよ？」

セルシウスは妖艶に笑みを浮かべ、少女の攻撃を軽く回避する

「っ！！！！」

少女の表情がだんだん苛立ちの感情が浮かぶ

振り返り、怒りを込めるように野太刀を振り上げ、セルシウスに向けて思い切り振り下ろす

「小娘にパワーを求めるものではないけど…イフリートはもっと力強い…まあ…熱くて鬱陶しいけど…」

だが、嘲笑うように少女の表情を見据え、逆手に構えた両刃剣で軽く防御する

「クソがあっ！！！！！！！」

そして、完全に切れた少女はがむしゃらにセルシウスに斬りかかる捕獲するなんて関係ない…今は鬱陶しい目の前の精霊を完全に消し去ってやるという気持ちだけで、少女はすべての人間の急所を狙い、剣を繰り出す

「ウンディーネはもっと流れるように綺麗な動きをするし、ノームはもっと重心移動の運びが上手い…」

そんな少女の攻撃をなんとも思わず、ただ受け流す
その上、表情は涼しく、余裕が目に見えてわかる
その表情が、少女の怒りを余計に駆り立てる

「動きが単純よ…まあ…それを待っていたんだけど…」
「なんですって！…！キャツ！…！」

セルシウスは両刃剣で野太刀を防御するとそのまま流れるように受け流し、少女の背中を蹴り飛ばす

「見せてあげる…精霊の実力を…白き御手よ…清冽なる棺に封じよ…」

「まさか！…！」

「陛下！！アスベル！！何処かに隠れるんだ！！！」

少女が驚愕すると同時に、マリクは叫び、それを聞いた全身の力を振り絞り、アスベルとリチャードはなんとか近くの物陰へと隠れる
それと同時にセルシウスの足元に魔法陣が展開される
術式が体に纏わりつくように動き、最終的にセルシウスの周りに規則性のある動きで回り始める

「さあ…これが私の力よ…アブソリュート！！！！！！！」

セルシウスが術名を叫ぶと同時に、少女の足元に巨大な魔法陣が浮かび、少女の周りに氷柱が隆起すると同時にどんだん王の間を氷漬けにしていく…

そして…隆起した氷柱が碎け散る

氷漬けになった王の間で佇むアスカの姿をしたセルシウスは…

まさに氷の大精霊に相応しい威厳ある姿を体現していた

「代行者を知る人間が動き始めた…すべてが廻り始めたわけね…」

セルシウスはアスカの身体を見下ろし、ボソツと呟く

これからアスカに襲い掛かる苦難の道

【代行者】という運命に巻き込まれ、常に危険と隣り合わせの世界へと向かわせてしまうアスカのことを想い、静かにセルシウスは
瞼を閉じる

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8304w/>

テイルズ オブ リュミエール

2011年10月24日03時21分発行